

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 祭祀の時空：ヒト・モノ・異界の接点

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 石井, 匠<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00001962">https://doi.org/10.57529/00001962</a>                      |

# 祭祀の時空

## —ヒト・モノ・異界の接点—

石井 匠

### 要旨

本論は、本学伝統文化リサーチセンター第1グループが標榜する「祭祀考古学」の根幹をなす「祭祀」について、実践論的な観点から考察を試みている。祭祀儀礼の一般的な議論から始まり、祭祀（祭儀）の核に存立する「聖なるもの」や「祭祀の時空間」の問題、祭祀行為の境界性、境界の媒介者としてのヒト・モノ・場の問題、ヒト・モノの対称性、創造行為の問題などといった祭祀の中核にあるものを巡る諸々の問題を中心に、祭祀考古学において研究対象となるモノと場が、祭祀の行為者との間にどのような関係性を切り結んでいるのか、そもそも「祭祀」とは如何なるものかを論じた。このような視座は従来の考古学には欠けていたものであるが、祭祀はヒトが超自然的存在にコンタクトをとろうとする宗教的な行為であり、そのような祭祀の核に横たわる「聖なるもの」を巡る諸問題は、古代の祭祀を議論する上では避けては通れない。祭祀考古学と言う以上は、その礎を築いた折口信夫や大場磐雄が見つめていたはずの祭祀の中核にある「聖なるもの」や、その聖性の探究にこそ主眼を置くべきであり、そのような不可能とも思える問題を究明しようとする「祭祀考古学」の試みは、現代人が抱えるの「こころ」の危機を救う可能性を秘めた「歴神話」の創造に繋がる行為であるといえるだろう。

### キーワード

祭祀考古学、聖なるもの、祭祀の時空、境界領域、ヒト・モノの対称性、カオスの「具現化」、歴神話の創造

### はじめに

本稿の主たる目的は、祭祀考古学を考究する前提として、経験論的ないしは実践論的な観点から「祭祀の時空」とは何かを考察し、祭祀の中核に存立するものの実態を明らかにすることにある。ここでの「祭祀」とは、広義の祭りや宗教的儀礼・儀式を包括したものとして扱うが、考古学において研究対象となる「祭祀」は、祭祀を執り行う行為者がある特定のモノを用いて、一定の場・空間においてカミ・精霊・祖霊などの不可視の超自然的な存在 (supernatural being) に対し、何らかの働きかけを行った痕跡が、今日まで残されているものに限定される。

我々が確認できる「祭祀遺跡」<sup>(1)</sup>に残された痕跡は、祭祀儀礼の最終段階の残り香程度に過ぎず、それら物的証拠に依拠する考古学の性質上、特定の祭祀の全貌を明らかにすることは当然のことながら不可能である。帰納法的に可能であるのは、残された痕跡から漠然と行為の輪郭をなぞり、何らかの祭儀が行われた蓋然性を指摘できる程度だろう。しかし、それでは従来の成果から何も進展しないままである。

祭祀考古学を標榜する我々が敢えて踏み込み、推

し量ろうとするものは、その先にあるのだ。それは祭祀の行為者の「心」の動きや働きであり、モノと行為者との間に交流しているものであり、あるいはモノを介して行為者が働きかけているであろう「不可視のもの」である。したがって、まず議論しておかねばならないのは、祭祀の本質に抵触するそれらのものとなる。

以後の議論は、それらを考察するための経験論的、実践的観点の叙述が多くなるため、実証主義に重きを置く従来からの考古学からは無縁のもののように思われるかもしれない。しかし、古代の祭祀を解釈するため、あるいは祭祀儀礼行為における「モノ」や「心」を解明するには、祭儀の核にあるものを看過することはできない。また、このような祭儀の核心に触れようとする試みは、我々「祭祀遺跡に見るモノと心」グループが標榜する「祭祀考古学」が、新たな地平を求めて離陸するための一助となるはずであり、議論を進めていく中で研究プロジェクト全体を通じて考究すべき問題が浮き上がってくるであろう。そして、それらは祭祀考古学の先駆者である折口信夫や大場磐雄が追及を試みた核心と共振するはずである。

## 1. 祭祀の核—「聖なるもの」

祭祀や儀礼において重要な役割を担っているのは、言うまでもなく司祭やシャーマン、あるいは呪術師と呼ばれる祭儀を取りしきり執行する行為者である。彼・彼女の周囲には間接的に補助をする人物がいる場合もあり、あるいは彼らを取り巻き、祭儀の目的を共有し、その効果を期待する家族や集団、その背後にある社会などの存在が想定される。

遺跡に残される祭祀儀礼の痕跡は祭儀の際に行行為者や周縁の人々によって設置・埋納されたものや、終了後に放置・遺棄・破棄され、腐敗を逃れたごく一部の物質である。したがって、それを分析する考古学者は当然の如く、祭儀の最終形態にさらに時間経過のバイアスがかかった痕跡から行為の一部分を復元するに止まるしかなく、その目的・行為や所作・身ぶり・歌・音楽といった無形のものの一部始終を復元することは不可能である。

しかし、忘れてならないのは、たとえ行為の一部始終を復元できないとしても、祭儀の核にあるものは不変であるということだ。いつの時代も祭儀の行為者が祈りを捧げ対話し、交感する対象は祭儀の中心に厳然と存在している。たとえ、呪具の使用や破壊、埋納行為などの痕跡が遺跡から拾えたとしても、行為者によって直接手が下される道具（物）が祭祀儀礼の中心にあるのではなく、中心に存在しているのは、使用された道具の背後にある不可視の何ものかであり、行為者の内的体験にあることは疑いようがない。それは、祭儀を行う対象として山野河海・岩石・樹木などが選定されたとしても同じである。

祭儀の執行者は、石や樹という単なる物質に働きかけるのではなく、彼らが見据えているものは、それらの背後にある何ものか、それらに付与している何ものか、ないしは周囲を取り囲み浮遊している何ものか、あるいは石や樹そのものに宿る何ものかなのである。換言すれば、「いのち」と呼べるものかもしれないし、「幽玄」と呼ばれるものかもしれないが、神仏や精霊に相当する超自然的な存在である。それが具体的に何であるかは知る由もないが、それらは、ルードルフ・オットーが「ヌミノーズ」と呼び、ミルチャ・エリアーデが「ヒエロファニー」と呼び表した、モノや場に立ち現われる「聖なるもの」であることは確かである。

あらゆる祭儀の核には不可視の「聖なるもの」が存在し、祭儀における時空は、それを中心に展開しているのである。

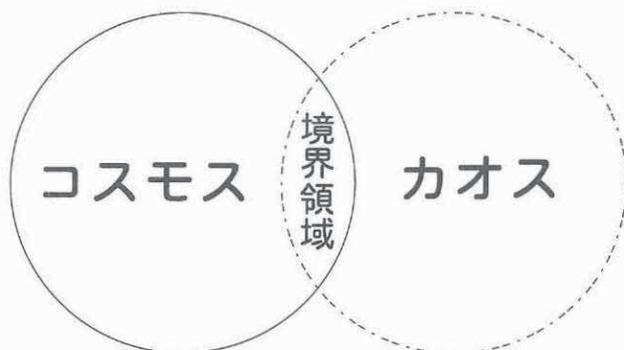
## 2. 祭祀の境界領域

祭儀の核に存立する聖なるものは、特殊な時空間に立ち現われる。仮に、我々が存在し五感によって知覚し得る秩序だった世界を「コスモス」(cosmos)と呼ぶとすれば、不可視の「聖なるもの」はコスモス外の世界、ないしは知覚世界を超越したコスモスとは対立する世界に存在するものであり、つまり「カオス」(chaos)に浮遊する何ものかであるということになる。

その場合、コスモスとカオスは対立し隔絶された時空間として独立して存在しているのではなく、下図のように、両者が重なり合う境界領域が存在する。それは空間や場であるならば聖地であり、あるいは、特殊な状況下に置かれ聖化された身体やモノもその役割を果たすことがある。

この特別な回路によって、両界は通行が可能となるのだが、そもそも両界の境界領域は、コスモスとその秩序を歪ませるカオスが渾然一体となった時空間であり、それは生と死が渦を巻くような危機的状況下におかれた異常な場である。それ故に、あらゆる民族において境界領域への侵犯は重罪とされたり、聖化された身体を見ることも触れることも避けられたりする。

そのような異常な時空間の境界領域においては、カオスに浮遊する聖なるものとの交感が日常の時空間よりも飛躍的に深化する。しかし、「聖なるもの」はヒトの物理的な制御の範疇を越えた存在であるた



め、それを異常な時空間においてコントロールするには、通常の身体では耐えることができない。そこで聖化された身体をもつ媒介者が必要となってくる。

### 3. 境界の媒介者

両界を取りもつ媒介者は、特別な能力を先験的に保持する場合もあれば、一定の儀礼を体験したり通過したり、修練を積んだりすることによってその資格が与えられる場合もある。いずれにせよ、媒介者の任は境界領域の時空間において、カオスの過度な侵犯を制御しつつ、自らをフィルターとして、コスモスとの仲とりもちをすることにある。その際、媒介者の心身は生死が同居する極めて不安定な状態に置かれ、媒介者は引き裂かれながら生死を往還する自らのアンビヴァレンスな心身をも制御しなければならなくなる。そのために厳粛な手続きや作法・形式が必要となり、媒介者はそれらの約束事に沿い、一挙手一投足を誤ることなく肅々と祭儀を進めることで、聖なるものの圧力に耐えながら、両界に引き裂かれる心身をコスモスに辛うじて繋ぎ止めることが可能となる。そのバランスが一旦崩れると両界の過度な接近を許し、世界の秩序と均衡を崩壊させる事態を招きかねない状況に陥る、という危機を常に孕んでいる。

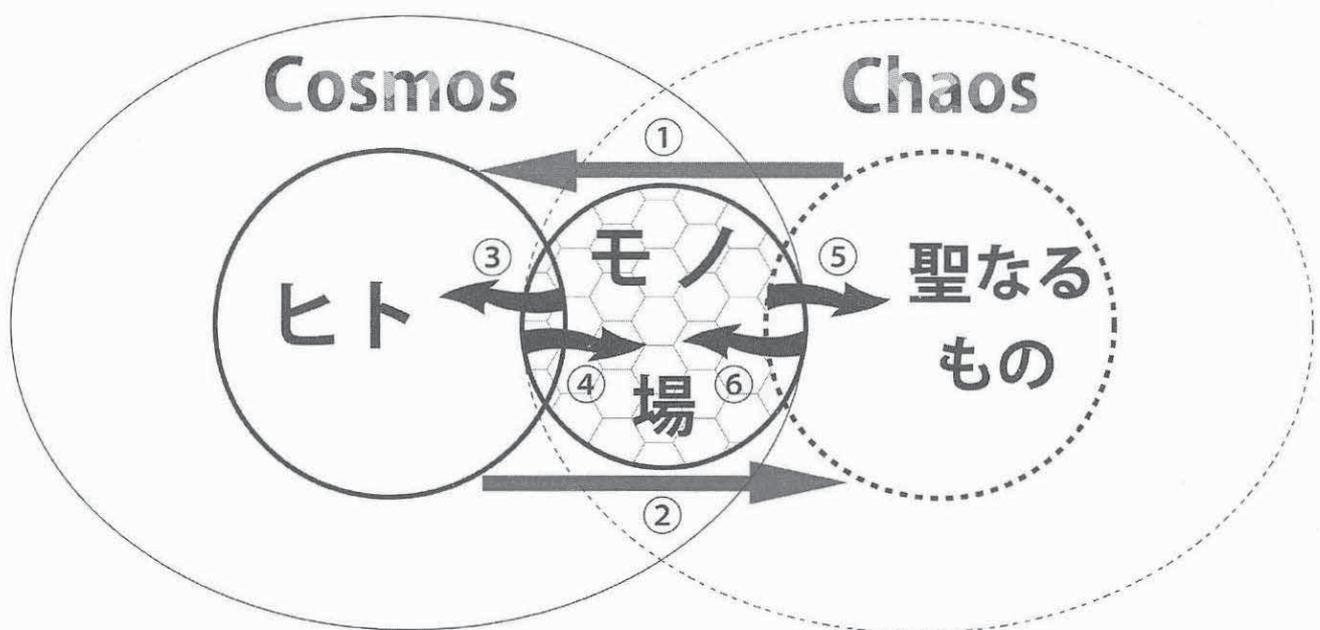
そのような状況下において行われるものは祭儀の

一形態にすぎないが、無論、さまざまなレベルの祭儀が存在し、特殊な場や媒介者を必要としない場合もあるだろう。しかし、あらゆる祭儀はどのような場で行われようとも、行為者は常に異界に浮遊する「聖なるもの」との交感を志向しているため、どのようなレベルの祭儀であろうとも、それが執行される場や空間は境界領域に属することになるということ認識しておく必要がある。それは、考古学的な事象に即応するものではないが、祭儀が行われたモノや場を考察する上では非常に重要な視座となる。

### 4. モノ・場—異界との接点

考古学において祭儀を究明しようとする場合、対象となるのは祭儀が行われたであろう場（祭祀遺跡・遺構）と祭儀に用いられたであろう道具（祭祀遺物）である。これらは様々な状態で今日まで残されているのだが、個々の問題はさておき、ここでは「祭祀行為」において、行為者とモノと場がどのような連関性を保持しているのかという点に絞って論じることにした<sup>(2)</sup>。

祭祀がカオスとコスモスの境界領域という特殊な時空間で行われ、両界を結ぶ回路としての聖地があり、聖化された身体がその役割を担うという点は既に指摘した。しかし、祭祀を執行する際に道具が用いられる場合、その道具は特殊な場において使用さ



祭りの時空間モデル

れる道具であるから、道具自体も場や使用者と一体となることで、境界領域の回路としての聖性を帯びることになる。考古学において実際に分析できる対象は祭祀に使用された道具類（モノ）と、祭祀が行われた空間（場）に限られるため、両者を中心に「祭祀の時空間」モデルを描くと前頁の図のようになるだろう。無論、祭祀の執行者（ヒト）も境界領域の回路の中心に立つ場合があることは先にも述べたことである。

前頁のモデル図からは「ヒト」と「モノ・場」と「聖なるもの」との、さまざまな接点や関わりを抽出することができる。図上の矢印は三者の物理的な関与、ないしは観念的・内的な交流・交感のベクトルを示すものだが、それぞれが個々に独立しているのではなく、すべてが循環的な関係性を保っている。

例えば、ヒトが聖なるものからのコンタクトを感じし（①）、それに対する応答やリアクションをとる（②）。そうした交感のなかで祭祀を行う場が選定されたり、祭祀に必要な道具づくりが行われたりする（④）。その際には、聖性を帯びたモノや場からの直接的な問いかけもあるだろうし（③）、モノと場がヒトの介在なしに聖なるものとの何からの往還を行う場合もある（⑤・⑥）、といった具合である<sup>(28)</sup>。このように、さまざまな局面を想定できるのだが、ここではいくつかのポイントに絞って論を進めることにしたい。

## 5. ヒトとモノとの接点

ヒトとモノとの接点は、祭祀との関わりを考えなくとも、モノづくりやモノの使用・廃棄などのように常に存在する関係性である。また、祭祀においても、単に儀式儀礼が行われる時間だけを祭祀とは呼ばず、祭祀を執行するに足る場の選定や道具（モノ）の制作など、素材収集からモノの廃棄に至るまでの行為を包括して祭祀と呼ぶのであれば、祭祀の準備段階であるモノづくりは非常に重要な位置を占めていることになる。

ただし、ヒトは生活に必要なさまざまな道具を自らの手で作りださなければならないのだが、縄文土器のような日用雑器にまで過剰な装飾をまとうせ、土器空間を二極化させるような文様構造を創出する（石井 2009）という事実からすれば、祭祀に用いら

れる呪具であろうとなかろうと、あらゆるモノには制作者の思考を反映した何らかの世界観が織り込まれている点は注視すべきである。

したがって、ここでは伝統的な考古学的方法に基づいて祭祀遺構や祭祀遺物の線引きを行うための分類に労力を費やすのではなく、ひとまずはモノそのものがどのように形づくられ、使用され廃棄されるのかという一連の動態を鑑みながら、モノが生み出される局面でのヒトとモノとの接点を探り、ヒトとモノの間にはどのような内的親和性があるのか、ということに問うことから議論を始めることにする。

## 6. ヒト・モノの対称性

モノづくりにおいて、しばしば、制作者の脳裏にひらめくものがある。それは古来、芸術家たちが「インスピレーション」と呼びならわしてきたものである。「神が舞い降りた」であるとか「神の啓示」や靈感ともいわれるように、人智を超えた超越的な存在やカオス（異界）から、インスピレーションが降りてくるというのは芸術家たちの感覚的な証言であるが、脳科学からすれば、インスピレーションは異界から降臨してくるようなものではなく、脳の働きによって生まれるものであり、脳内に形成された「もともと誰にでもある『ヒト固有』の遺伝子から創り上げられた『機能的』な神経回路」（川村 2008）によって生み出されるものとされる。

しかし、ここで問題なのは、インスピレーションを科学的に説明することにあるのではない。モノづくりの現場で格闘し続ける芸術家たちが、靈感は異界から舞い降りるものだと言い、受動的にそれを看取するという感覚価値が問題となる。芸術家は現代社会では異質な才能を持つものとして特化されてしまっているが、しかし、そのような感覚は脳科学からいえば「機能的神経回路」の強化に程度の差はあれ、ヒトであれば誰もがもっているはずの感覚であることになる。

そこで、このような「非科学的」感覚は如何なるものなのかを芸術という分野だけではなく、伝統的な土器づくりにおいて見てみることにしたい。プエブロ・インディアン<sup>(29)</sup>の土器づくりの名手、デキストラは次のように語っている。

「地球をつくっているすべてのマテリアル（素材）

というのは、生命をつくりだす何か特別なものです。私が“自然から何かをとるときは、必ずそれとコンタクトをとらなければいけない”と言うときの意味はそこにあります。(中略)粘土もその一部。生命をつくりだす特別なものの一部です。粘土は、ある意味では、聖なるものです。(中略)

粘土と私は、同じ素材。“ひとつ”です。あなたは粘土を触りながら自分を触っている。粘土がしてほしいと望むことを、あなたはする。“創造”といわれていることは、すべて、この作業です。(中略)私は、大きな全体の一部。私を含むすべてのものが、いっしょになって動いていく。」(徳井 1992)

デキストラの証言は、現代的な感覚からいえば非科学的な思考である。しかし、土器づくりの制作者がそのような感覚を持ち合わせているという事実は看過できない。土器づくりにおいては、粘土はただの素材ではありえず、同じ大地から生まれ出でた制作者自身と一体の存在であり、意識・無意識を超越した感覚世界でコンタクトを取り合える「対称性」を保った関係にあるという点は重要である。

この関係はモデル図のモノとヒトとの交感に該当するが(③・④)、デキストラの場合、粘土が望むことをヒトがすると言う。このようなヒトと粘土が対称性を保って交感しあうという現象は、現実的にはあり得ないように思える。しかし、この感覚を評価するのであれば、ヒトと粘土の間に対話が成立するということは、もの言うヒトがモノに語りかるときに、本来はものを言わない粘土(土器)がそれに呼応するのだから、粘土の側に、常識的には考えられないような何らかの異変が起きているという想定が成り立つ。その異変とは何か。

土器(モノ)づくりというコスモスとカオスが交錯する創造の時空間においては、「聖なるもの」をバックグラウンドにもつ、ものを言わないはずの粘土が、デキストラに語りかけてくるようになる(③)。と同時に、彼女は粘土に語りかけ対話を行う(④)。このとき、土器(粘土)というモノは、カオスとコスモスの両界に同時に何らかの回路をひらき、両者を媒介する役割を担っていることになる。デキストラの語りから読み取るに、土器の背後にある超越的な存在は、アメリカ先住民たちが共通にもっている mother earth であろう。とすると、粘土が語る

というよりも「母なる大地」という意志をもった聖なる子宮が、粘土を仲介してヒトに語りかけていると言っているだろう。モノづくりにおけるヒトとモノとの対称的な関係性の裏側には、そのような景色が広がっているのである。

## 7. 創造の現象学

モノづくりといっても、製作と制作とはまるで性質が異なる。両者の差異は「製造/創造」と言い換えることもできるだろう。ここでは、考古学で議論されるような、ものの「製作」という面は一旦切り捨て、「創造」という時空間に現出するヒトとモノとの交感について、実践的な観点からもう少し深く掘り下げてみたい。

ヒト・モノの両者の間に対称性が成立するとき、モノはコスモスとカオスの両界に間口をひらく。ふたつの世界に開放されたモノというモジュールの働きによって、ヒトはカオスに浮遊する「聖なるもの」との対話が可能となる。この対話は創造を行うヒトの心の内奥で起きている内的な現象であるが、実際にはモノが創造され具現化される以前・以後において、聖なるものとヒトとの直接的な交感の実現している。たとえば、芸術家がインスピレーションを感受する際に起きている脳の働きである。

モデル図に即すと、創造以前・以後の心の働きは①・②にあたる。創造の契機はさまざまであるが、ひとは、聖なるものからつくり手であるヒトへ、何らかの働きかけがなされる場合がある(①)。あるいは、逆にヒトから聖なるものへの問いを発端とする場合もあるのだが、どちらにしても、いったん交感が始まると、創造の時空間はコスモスとカオスが交わる境界領域へと変容し、これから創られるモノの素材・形・色・場・時間の指定や選定などを、ヒトと聖なるものとの間の問答(交感)によってヒトが決定し、モノが形づくられていく。

このようなベクトル①で生じる現象は、言い換えれば、「モノの到来」と呼べるかもしれない。芸術家のインスピレーションの中には、個別具体的な形・色をともなった、他者には不可視のビジョンが含まれている。モノが誕生する以前の他者には不可視のモノ性が、つくり手の脳内に到来し、それによってつくり手は、その「モノ」の具現化を余儀なくされ

るという場合が多い。

また、実際にモノづくりが開始されると、デキストラのように、つくり手は次第に姿を現し始めるモノ、境界領域のインターフェイスとしての機能を獲得しつつある目の前のモノとの問答を開始することになる。そうすると、①・②の交感③・④の交感へと移行していく。その場合、モノをつくる過程で、モノが突如として「語り」だすという不思議な現象が起きてくる。その瞬間、「もの」は単なる物ではなく、もの言う「モノ」として、つくり手に働きかけ始めるようになる。

こうして、カオスとコスモスが混在する創造の時空間では、異常とも思える「モノ語り」が始まるのだ。

## 8. 祭祀のモノと場

創造の時空間でおきるヒトの意識の変容は、モノづくりに限られることなく、境界領域である聖地や祭祀場の選定においても同様に起こりうる。ヒトが「場」から何らかのコンタクトを感受したり(③)、夢見に「場」を教えられる(①)ということなどによって、聖なる場所が選ばれる、あるいは啓示されるという例は日本や世界の神話伝承にも多く見受けられる。そのため、聖なる場所が選定された理由を、単に地理学的条件や天文学的事実との関係性に求めても全く理解ができない遺跡が存在するのだろう。

ところで、祭祀は創造の時空間で生み出されたモノを使って、境界領域の聖的空間でおこなわれるものだが、聖化されたモノやヒトでなくとも、聖なる空間に立ち入る・持ち込まれるだけで、ヒトやモノは特殊な時空間に取り込まれ、聖性を帯びることになる。つまり、呪具のような特殊な道具でなくとも、日用雑器ですら聖化されたモノとなるのである。祭祀とはヒトが場とモノという回路を通じて、聖なるものと直接的な交感を試みる場であるのだ。

そのように考えると、たとえば縄文時代の環状列石のように、単なる自然石によって特殊な場を囲い区切るという行為には、何らかの特別な思念があったはずである。石は固く恒久的であり、磐境ともいわれるように、古来、異界との結界としての役割を担ってきた。そのような性質をもつ石によって場を囲うことによって、他とは明確に分別された異質な

空間を創出することは、視覚的に識別するためであるとか、単なる空間の象徴化ということを意味するのではないだろう。そこに現出するコスモスとカオスが渾然一体となった祭祀の時空間を石によって囲い込む・塞ぐという意味があったのかもしれない。

いずれにしても、なぜ石でなければならなかったのか、なぜ円形(方形)に空間を囲ったのか、なぜ、その場所を選んだのかという問題を解くには、地理学的、天文学的事象とともに、ヒトとモノと聖なるものの内的な連関性を読み解いていかねばならないだろう。祭祀とは何かを問うのであれば、その根本的な問題を避けて通ることはできない。

前節までに論じてきた祭祀の時空間において境界領域のインターフェイスとして働くモノと同様に、祭祀の執行者たちによって聖化される「場」や「空間」も、ヒトの心の内奥では異界や聖なるものからのコンタクトを看取する特殊なモジュールなのである。

## 9. 祭祀の時空—歴史的時空の逸脱

祭祀や祭りの本質を一言で表わすならば、それは、カオスの「具現化」である。宇宙の始原であるカオスは、コスモスの成立によって失われた世界ではなく、祭祀によって引き戻されうる時空である。祭祀という行為はコスモスにカオスを呼び込み、秩序だった世界を解体し、ヒトに野性を呼び覚ませる行為なのである。

他の生物よりも発達しすぎた脳をもってしまったヒトは、他の生物のように世界をあるがままに受け入れることができなくなってしまった。肥大化した脳を駆使して時間という概念を創り上げ、世界を分離し、自らをひたすらに去勢するという、生命の本来のあり方からすれば逆行する行為によって、「文化」や「文明」なるものを築き上げ、人類は生き伸びてきた。とりわけ、システムティックな現代社会においては、カオスほど不必要なものはない。しかし、ヒトの意識に潜在化したアルカイックな野性は、秩序を破壊し尽くす渾沌を欲するのだ。

コスモスとカオスが渾然一体となった時空。

そもそも、宇宙誕生においても生命誕生においても、カオスからコスモスへという段階的な発展を遂げてきたわけではない。宇宙も生命もカオスとコスモスが交わり合い、両界の暗合の着床によって生ま

れ出でたものである。

その意味では、特別な時空間のなかで執り行われる祭祀は、直線的な歴史的時空を逸脱し、カオスを呼び込み、螺旋的な循環の時空を再生産し直すことで、暗合の受胎時へとヒトを回帰させ、死と再生を反復することによって世界の刷新を図る行為であるといえるかもしれない。

## 終章 祭祀考古学の可能性—聖性の探究

考古学は読んで字の如く、「過去」という現在とは別の時空で生死を繰り返していた人々の痕跡を大地の底から暴き出し、そこから這い出てくる一握りの「遺骸」や「遺物」、「遺構」と呼ぶものたちと対峙し、それらの断片をつなぎ合わせながら、推理と推察による仮説を立て、失われた過去を「歴史」として再構築する知的行為である。

この学問によって、人類はかつては存在しえないと信じられていた「先史時代」という時空を創出し、さらに「歴史時代」の「史実」の穴を補完することで、「人類の歴史」を創り上げてきたのである。その「歴史」は、人々によって更新を繰り返し、常に塗りかえられてきた。

故に、当然のことながら我々が認識しておかねばならないのは、今、この時点でわれわれが「明らかにした」と思い込んでいる「史実」なるものは、ごくわずかの断片を証拠とした推論の積み重ねによる仮説で成り立つ、仮初めの「歴史」や「史実」であって、当然のごとく本質的に「事実」などではなく、ましてや「真理」などでは到底ありえないということである。

如何に客観性や実証性、歴史相対主義を標榜しようとも、究極のところ、超越的存在でもない限り絶対的な客観性などあり得ないし、ましてや、われわれが地中から浮上してくる過去の痕跡に対して考究していることのすべては、絶対的な「真理」などではなく、現在までに積み重ねられてきた「知識」というフィルターを透して振り返り、現時点で復元しえた物語であるにすぎない。しかも、その物語は廃屋の障子紙以上に穴だらけであり、時が経過するにしたがって、その穴は埋まるどころか逆に裂け目が広がり、暗黒の闇へと埋没していくのみなのである。

極論を言えば、我々が「歴史」と呼ぶものは、人

類が存続する限り、未来永劫「現生人類」によって、常に創り変えられる共同幻想的な神話的物語であるにすぎない。日本を例にとれば、現代人にとっては空想と思われている記紀神話の「物語」も、古代人にとっては紛れもない「歴史」であったであろうし、「史実」と信じられてきたであろうことは、それこそ「事実」である。とすれば、神話を喪失した現代人が信じきっている「科学」に拠って立証される「歴史」も、未来の人類がひるがえって見たときには、我々がかつての神話を空想と誤謬の所産であると失笑に伏すのと同様の誹りを免れないのだということを、まずは自認しておくべきであろう。

別の言い方をすれば、我々は「神話」を「歴史」という言葉にすり替えて、時流に合った「歴神話」ともいべき物語の創造と破壊という知的遊戯を繰り返しているだけなのである。

という、歴史学者や考古学者の仕事は無意味で、荒唐無稽の妄想物語を勝手につくりだしている、と私が言っていると誤解を招くかもしれないが、全くそうでない。

歴神話の創造。その地平に立つとき、現代において我々が背負っているものの重大さに気づくだろう。神話を喪失した社会は、「人はどこから来て、どこへ逝くのか」という人間存在の根本にかかわる問いに答えうる精神の拠り所を欠如していると言ってよい。そのような現代社会において、歴神話のはかつての神話の代替物などではなく、我々人類が過去という鏡をたずさえ、現在を十全に生ききり、未来を切りひらく糧となるのである。

その意味で、過去に生きた祖先たちが、ヒトでも動物でも植物でもない異質な不可視のなにものかを信仰し、その不可視のなにものかに向かって行っていた行為や、その「ところ」の在りようを考究することには大きな意義がある。

現代の多くの日本人は、無宗教を公言する世界的にも稀な存在である。第二次大戦の痛手を抱えつつ、資本主義経済に心酔し、物質的に「豊かな生活」を求め、エコノミック・アニマルと侮蔑されたほどに進歩と発展を目標に自己犠牲も厭わず、驚異的なスピードで戦後の日本社会を立て直してきた。今、その歪みが波となって押し寄せているのだが、振り返ってみると、盲目的に「豊かな生活」を目標に邁

進し、それを実現したバブル経済が崩壊して以後、日本人の多くは精神的な拠り所を再び失ってしまったように思う。

しかし、かつての国家神道に戻るわけではなく、かといって、私たちには一神教のような後ろ盾があるわけでもない。根なし草のように浮遊しはじめた矢先に、凄惨な地下鉄サリン事件が起こった。これによって宗教は危険視され、その後も新宗教の事件が相次ぎ、その闇の持つ怪しさやいかがわしさだけが露呈し、私たちの心に焼きつけられた。そして、宗教に対する嫌悪感のみが残され、現代の日本社会では、「こころ」の拠り所が決定的に失われたのである。

その穴埋めとして、昨今のスピリチュアル・ブームに見られるような「霊能者」の書籍が飛ぶように売れたり、世界神話の断片が織り込まれたゲームや映画がヒットを飛ばしたりするのだろう。あるいは、日常からの離脱や自己の解放を求めてライブやイベントに足しげく通うのだが、それもまた伝統的な本来の「祭り」が換骨奪胎された刹那的な陶酔を味わうだけの「催しもの」にすぎない。誰しもが言いようもない不安感を無意識に携えながら、それらに群がるのだが、「こころ」の核の部分を養い癒してくれるわけではないことは分かりきっているため、空しさをどこかで感じながらも、次から次へと消費を繰り返すしかないという堂々めぐりに陥っている。

ならば、この混沌とした時代を歴神話が救えるのかというと、私自身は確信がもてない。しかし、視野を広げてみると、日本のアニメーションやマンガが世界的に評価を受け（批判にも晒されてはいるが）、巨大な市場となりつつある現実には、「こころ」の空洞を抱えているのは日本人だけではないことを示している。

とりわけ、日本人の固有の精神性や文化的、神話的要素が多分に盛り込まれた宮崎アニメが世界中でヒットし評価を受けるということは、大きな示唆を含んでいる。「風の谷のナウシカ」に始まり「隣のトトロ」や「もののけ姫」、「千と千尋の神隠し」、最新作の「崖の上のポニョ」にいたるまで物語の中核をなしているのは、日本人のこころの内奥に流れ、確実に存在し続けている「不可視のなにものか」である。それは、おそらく「日本人」という枠を超えた普遍性を持ち、世界レベルで希求されているもの

である。だからこそ、宮崎アニメが国境を越え、子供から大人まで多くの支持を受け、世界中の人々の心をうつのである。

人々のこころの琴線を震わす、なにものか。それは日本考古学の研究対象から意図的に外され、決定的に欠けていたものである。そして、それは長年にわたって実証主義一辺倒の歴史学を標榜する日本考古学が黙殺し続け、ようやく恐る恐る語り始めた「精神文化」や「祭祀」・「呪術」・「儀礼」と呼ぶものの中核にあるものである。

我々考古学者が、この時代において今なすべきことは、保守的・排他的な因習を打ち捨て、蛸壺的な学問から脱皮し、日本列島に生きた人々が歴史を創造し続けた、その原動力として働いてきたもの、人類のこころの根底に流れるもの、その不可視のなにものかを掘り起こす作業を始めることだ。この挑戦は遅々として進まず、批判を浴びるだけかもしれない。だが、「日本人」とは何か、人間とは何かを問うとき、その奥底に眠る本質にあるものを、祭祀考古学を標榜する我々が、今こそ一歩踏み込み、問い直し、掘り起こすことで、時代の危機を打開する一手を打たねばならない。

考古学という学問の目的や役割について、誰もあまり明確に語らないのだが、それは「素晴らしい」人類の歴史的文化遺産を後生大事に後世へ残し伝えることだけにあるのではない。我々の目的、課された役割は遺産の保護保存の「以前・以後」にある。究極のところ、考古学が現代において真に必要なとされるのは、過去を掘り起こし、人類が今この瞬間を生き抜き、未来を切り開き創造していくための叡智を過去に読みとり、そのメッセージを世界に生きる同時代人々に伝えること、その一点に尽きる。現実存在する過去の物的遺産はそのシンボルである。だからこそ、それらを破壊から保護し守り抜いて伝え残さねばならないのだ。

祭祀考古学を標榜する者は、折口信夫や大場磐雄の礎を基に、その重大な役割の一翼を担い、歴神話を創造する最前衛に立っているという事の重大さと責務を深く自覚し、この聖性の探究というミッションを遂行していかねばならない。

未来は我々の肩に重くのしかかっているのだ。

## 註

- (1) 本稿における「祭祀遺跡」は、一般的にいわれるような古墳時代以降のものを指すのではなく、祭りや宗教的儀礼と思われる行為の痕跡や遺物が残された、すべての時代の遺跡を包括する。
- (2) 以後の議論では「祭祀」という用語を多用するが、ここまで用いてきた「祭儀」と同義（祭祀儀礼）であり、便宜的に用いるだけである。
- (3) ヒトが介在するのは祭祀を執り行う時であって、それ以外の時間においても、聖地は聖地であり続けるし、モノが聖性をはく奪され、物質に還元されることは破壊や廃棄がなされない限りありえない。したがって、ヒトが介在しなくとも、モノ・場が聖なるものと恒常的に交感をしている想定は成り立つ。

## 引用参考文献

石井匠 2009 『縄文土器の文様構造』アム・プロモーション

- 川村光毅 2008 「音楽する脳のダイナミズム」『恋う・癒す・究める 脳科学と芸術』117-139頁、工作舎
- 小林達雄編著 2005 『縄文ランドスケープ』アム・プロモーション
- 小林達雄 「縄文のマツリ」『21COE 考古学シリーズ7 國學院大學 21世紀 COE プログラム国際シンポジウム予稿集 東アジア世界における日本基層文化の考古学的解明』125-131頁
- 徳井いつこ 1992 『スピリットの器 プエブロ・インディアンの大地から』地湧社
- 中沢新一 2006 『芸術人類学』みすず書房
- ミルチャ・エリアーデ／久米博訳 1974 『エリアーデ著作集 第三巻 聖なる空間と時間 宗教学概論3』せりか書房
- ルードルフ・オットー／華園聰磨訳 2005 『聖なるもの』創元社
- ロジェ・カイヨワ／塚原史他訳 1994 『改訳版 人間と聖なるもの』せりか書房